



イネばか苗病の発生と防除対策

近年、新規需要米（飼料米、多収性専用品種など）の栽培が拡大する中で、ばか苗病の発生が目立つようになってきました。イネばか苗病は、昔から知られていた病気で、カビ菌により発病しますが、種子消毒を徹底することによって、ほとんど忘れられた病害になっていました。しかし、近年、未消毒や消毒の不十分な種子で育苗されたイネ苗が移植されることなどにより、本田でも発生が目立つようになっています。

イネばか苗病は、主に種子で伝染します。種子にばか苗病菌が付着、混入していると、育苗過程（浸種、催芽、出芽）で菌が放出され、健全種子にも伝染して発生が多くなります。

このため、購入した種子（飼料米、多収性専用品種など）であっても、種子消毒剤の処理がされているかを必ず確認し、処理されていない種子については、下記を参考に必ず種子消毒を徹底して、ばか苗病を事前に防除することが必要になります。

1. イネばか苗病の主な生態

- 1) 主な伝染方法は、種子伝染です。前年にイネばか苗病菌に汚染した粃を種子に用いると、種子伝染します。
- 2) 育苗期では、第2葉期以降に症状が現れ、葉や葉鞘が伸びて徒長し、色が淡くなります。
- 3) 本田に移植後も、葉鞘や節間が徒長して黄化し、やがて枯死します。この枯死に至る過程で、株元などに多量の病原菌胞子を形成し、これが伝染源となります。
- 4) 病原菌は風などで飛散して、開花期の穂に付着し、粃に伝染します。

2. 防除対策

- 1) 前年にばか苗病が発生している圃場から、決して自家採種をしないことが必要です。
- 2) 未消毒種子は、ばか苗病に効果のある薬剤で種子消毒するか温湯消毒を必ず行います。なお、温湯消毒の単独処理より、温湯消毒後に微生物農薬を組み合わせる処理は防除効果を高めます。
- 3) 育苗中や本田でばか苗病が発病した株は、早期に抜き取り、その場に放置せず、離れた場所で土中深く埋設するなど適切に処分します。
- 4) 前年にばか苗病が発生した農家では、作業場を清掃して清潔を保ち、浸種、催芽で使用する容器や機材等は、あらかじめ丁寧に洗浄しておきます。また、苗箱やシート等は使用前に消毒剤（ケミクロンGやイチバン）で処理します。
- 5) 周辺でイネの種子採取圃が設置されている場所では、育苗中にばか苗病が発生した苗箱のイネは植えないように注意が必要です。

3. 種子消毒の方法

- 1) 水稲種子は毎年更新するのが基本です。JA等から購入する薬剤吹付種子は、既に種子殺菌剤（対象病害：ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病）と殺虫剤（対象害虫：イネシンガレセンチュウ）が吹付け処理されていますので、そのまま浸種作業に入ります。

2) 未消毒種子の場合は、

塩水選（うるち品種は比重1.13）で粃を選別し、次のいずれかで種子消毒を行い、浸種や催芽に入ります。

- (1) 化学農薬（モミガードC・DF[F:3と12とM1]またはテクリードCフロアブル[F:3とM1]などとスミチオン乳剤[I:1B]）の規定量液の中で種粃（袋）を浸漬してよくゆすり、薬液が袋の中心部までいき渡るようにします。このため、種粃袋に種子を詰めすぎないようにし、種粃1kg当たり薬液2ℓ位を目安にします。長時間浸漬では、処理中に1~2回攪拌します。防除効果を安定させるため、水温は10~15℃に保ち、処理後は水洗せず、浸種作業に入ります。
注）FはFRAC、IはIRACコードを記載しました（コードが複数は混合剤）。
- (2) 温湯消毒：「うるち品種」は、種子を60℃に保った温湯に10分間浸漬処理し、処理後は多量的水中で速やかに冷却します。なお、割れ粃が多い場合は、温湯消毒により発芽率の低下する危険性がありますので、避けてください。
- (3) 生物農薬（エコホープ、エコホープDJ、タフブロックなど）は、使用方法、使用時期などで適用病害が異なる場合があります。使用方法、注意点などを十分確認して、適切に処理します。

※ なお、温湯消毒や微生物農薬での種子消毒は、それぞれの単独処理では効果が劣る場合があるため、これらを組み合わせた処理で効果を安定させます。 記載農薬の登録は、令和5年2月21日現在です。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農NEWSはJA全農いばらきホームページでもご覧になれます。